

いも類振興会への期待

日本いも類研究会 会長 井上 浩

太平洋戦争による食糧難時代に、サツマイモとジャガイモがなかったら、どれほど多くの餓死者が出たかわからない。

その後、世の中が落ち着き、食糧事情も好転してくると、いも類の主食代わりとしての役割は終わった。代わって、でん粉用の需要が興ったが、それも貿易の自由化の進展とともに振るわなくなった。

こうして、いも作り農家も、いも畑も激減してしまった。そんな状態が長くつづいていた時の1983年（昭和58）に発足したのが「いも類振興会」であった。そこで同会は最初から、いも類の情報の収集と発信に力を入れ、その中から、いも類振興の道筋を探ろうとしてきた。年4回刊の「いも類振興情報」の発行と配布がそれで、いも類関係者にとっては得がたい資料になってきたはずである。

その創刊号が出たのが1984年。以来20数年、着実に発行され、本号は記念すべき第100号になる。そこで本誌のますますの発展を願っての、私見を述べさせてもらうことにする。

本誌創刊のころから実は、いも類にとっての良い風が吹き始めていた。きっかけとなったのは、アメリカのマクガバン上院議員の上院への提言「アメリカ人の食事目標」であった。1977年（昭和52）のことで、その影響は大きく、わが国でも関係当局が動いた。1983年にまず農林水産省が、つづい

て1985年に厚生省が、国民の健康づくりのための指針を示し、早急な実行を求めた。以来「健康食」ということが、やかましく言われるようになり、「健康食ブーム」が巻き起こった。その中で、いも類も優れた健康食のひとつとして見直され、マスコミも折りにふれて効能をPRしてくれるようになった。

ただその割には、いも類の消費量は増えていない。いも類にとっての順風を掴みきっていない。なぜなのか？いも類関係者が、いも類振興会に期待していることは、その原因を探り、需要拡大のための指針を示してくれることであろう。といっても、それほどむずかしいことはないし、それは又、関係者のひとり、ひとりが自ら考え、実行するしかないことでもあろう。

わたしは、いも類の需要を伸ばすには、その愛好者を増やし、その層を厚くするための努力をするしかないと思っている。そのための方法として、「いも類振興情報」に特別の紙面を設ける。そこで全国の、いも類の研究者、生産者、加工業者、販売者、いも類が大好きな老若男女などを、次々に紹介していく。

それを通して、いかに多くの人びとが、いも類に愛着を持ち、それと共にあるのかを訴え、いも類のファンを増やしていきたい。そんなことを、気長につづけてもらえればありがたいと思っている。